

慈眼寺だより

第5号

平成 20年 12月
春日井市下市場町
「慈眼寺」

電話 81 6801
編集 伊藤秀文

伊勢から春日井へ

篠木町 藤井健三

“何ごとの おわしますか
知らねども かたじけなさに 涙
こぼるる” 二千年の歴史を持つ
伊勢神宮、そのお膝元が私の古里
である。もう今から半世紀も昔の
話、卒業の年は不況の年で、当然
のように就職難の年であった。私
が体験した一つの例としてある会
社を紹介すれば、この会社は日本
を代表する大手家電メーカーであ
るが、三重県の中、南部地区で新
卒六十名を受験させて、採用者ゼ
ロというひどいことをやってのけ
た。今となれば疑問が残る結末で
ある。

六度目の挑戦でようやく得た職
場が春日井市に本社を置く電機メ
ーカーであった。人並みに家庭を
持ち、子を育て、家も建てた。四
十余年を忍の一字で勤め上げ、定
年を間近にした頃、永年苦楽を共
にした家内が、わずか一ヶ月の入
院で亡くなってしまった。余生、
これからと云う時に何とも残酷な

事であった。慈眼寺の奥様と家内
とは、町内のママさんバレーなど
を通じ親しくして戴いた事もあり
その縁で浩道和尚に引導をお願い
する事となった。以来最後の一区
画の墓地を分けて戴き、檀家の末
席に加えさせてもらった。

慈眼寺の再建

住職はじめ多くの関係者のご努
力により新たに立派に建立された
ことは周知のとおりである。本堂
の取壊しが始まった頃、日曜大工
を趣味としている私は、和尚に頼
んで本堂の柱を一本貰い受けるこ
とができた。六寸角の堂々とした
柱、桧材である。いずれ何かに使
えるかと、仕舞い込んでいた。

二年程がたち、そろそろお荷物に
なりかけた頃、知り合いから声が
かかった。市役所ロビーで開催さ
れる生け花展に出瓶する為に、そ
の受台になる物が必要との事であ
る。考えた末に思いついたのが猪
年をかついで猪牙舟であった。
展示台の巾に合わせて、長さ二尺
ばかりのものを二艘こしらえる事

にした。聞く所によれば、前の本
堂は百五十年も昔に建てられたも
のだと云う。百五十年前と云えば
アメリカのペリー提督ひきいる黒
船軍団が開国を求めて、江戸湾浦
賀に來航した時代ではないか。
「太平の 眠りを冷ます蒸気船
(上喜撰) たった四杯で夜も寝
られず」と狂歌に詠まれた時代で
あった。

桧の香り

まず始めに六寸角の柱を長さ二
尺ばかりに一本切る。古希を越え
た体にとつて、手引き鋸での作業
は大変だ。さらにそれを縦に二分
割する。舳先の部分を細くしてだ
んだんと舟の形に仕上げていった。
鋸で引く、ノミで彫る、カンナで
削る、その動きの度毎に桧の香り
がふくいくとあたりにただよう。

百五十年の時空を経て尚この香り
の強さ、香ぐわしき、桧という木
は千年もつと聞くが、その生命力
の強さをこの香りから、そして木
肌のつやから感じたことであった。
今、ここに私の目の前にあるこ
の柱を、百五十年昔の木工さん達
はどの様にして切り出したのだろ
うか? このお寺の建立にかかわ
った昔の木工さんたちも同じ香り
の中に居たのかと思うと、この桧
の香りを通じてなにやら先人たち
と語り合えた気がしたのだった。

〈青柳歌壇・俳壇〉

奉仕とは
受けしこの世の何ごとも
心にきざみ
つくすことなり

流舟

吾が心 豊であれば

人々の住まう世間に

鬼はなきもの

流舟

宵の町 闇まに匂う

木犀の香

久幸

あの人も この人も逝く

初施餓鬼

久幸

風光る 子の友達と

子の墓へ

貴美子

草取りて 茗荷の花を

見つけたり

貴美子

勤行の声

新年の 気となれり

清雄

積むは雪音

清雄

本堂の 仏様にも

お正月

秀

命のふんどし

檀方総代 伊藤正

昭和十九年十二月の上旬、中国は柳州飛行場の突撃作戦で右下肢負傷そのまま柳州で新年を迎えた。桂江に沿って下り梧州へ。二月頃になつて足の傷も良くなつた。所々で当面の敵と戦闘を繰り返す。六月ごろ兵力は減少し、重火器は弾薬欠乏、歩兵部隊に編入となつた。この頃には、日付も位置も移動方向すらも兵達には分からない。物資の補給も無いので食料などは現地調達、そうでなければ食なしの毎日であつた。

小高い丘陵地帯に大集落が見える。日干し煉瓦の家屋であるが建物は大きい。数日間、この地に大休止する。「各隊は設営逗留の準備せよ」命令受領から帰つた上等兵が大声で伝達

久しぶりに屋根の下で寝ることが出来る。設営、食べ物探し、一時間もすれば十分。ここでも呑気な日は長くない。四日目の早朝、近くの川の上流十五キロの地点にある集落に、敵の正規軍とゲリラが集結しているとの情報で、機関銃を主力とする二百名ほどの掃討作戦部隊が編成された。川に沿って進む。強行軍で昼前

には目的の地手前の林で待機。突然、先兵小隊が集落へ集中砲火を浴びせて突入したが、老人と子供ばかりで戦闘員はいなかつた。ここでも食料の確保に必死。短時間で小舟三隻に米、豚、砂糖など満載。長居は無用と撤退は速い。ただ、この掃討戦に同行したために大変な目に会うこと

になつた。

作戦の帰路、船で帰ることになり、民家から持ち出した老米酒を持って先頭の船に乗る。船がゴツゴツと川底にあたり乗り心地が悪いが酒をラツパ飲みして気分よし。川幅少し広がりが暑くてたまらん。小船だが竹の皮で作つた蒲鉾型の屋根が付いている。この下に入り、軍装も着衣も外し、ふんどし一枚になる。と、舟が浅瀬に乗り上げて動かなくなつてしまつた。後ろの二隻も同様である。様子を見ようと、船先に立ち上がる。川岸を行く中隊は一列になつて歩いている。その反対側に向いた瞬間、バリバリバリ。機銃の乱射がきた。

反対側に飛び込み、船べりにへばりつく。舟板の厚みは二センチ、ブツブツと銃弾が舟板を抜く。砂糖の入つた二つの南京袋に身を隠す。岸の友軍は消えてしまつた。二隻目に乗つていた加藤という軍曹が大声で「やられた」と悲痛な叫び。六〇メートルくらいのところをライチの木があり、敵はその下にいる。やつと友軍の重機関銃が応射し始めた。この機会に舟にいた全員が逃げ出し、

土手を這い上がっていく。竹藪の陰に残つていた機関銃分隊も引き上げた。残つているのは先ほどの負傷軍曹とふんどし一枚の自分の二人だけ。舟は対岸に船尾を向けて斜めになつているので、後方対岸からの銃弾は正確に着弾してくる。砂色の裸なら標的になりにくいだろうと目立つ白ふんどしを外す。我ながら冷静にし

て俊敏なことである。敵の射撃は短小銃になつたので、このまま日暮れを待つことにする。実に長かつた。薄暗くなつた船の中から拳銃を探り取る。これを口にくわえて頭だけを出して水を渡る。友軍の引き上げた川岸の土手を走り上がると、そこは一面背丈ほどもある里芋畑。我が進軍に驚いた住民が避難して潜んでいる。自分はふんどしを外した丸裸。住民は鉄砲を持っている。そこで機先を制して「ピンコウ(だれだ!)」

大喝一声、拳銃を一発里芋畑にぶち込み、一目散に民家の方向に走る。その小屋には六名の分隊員が居た。「おい、浅野。」「わー看護長、やられたと思つたよ。なんでまた、裸でどうしたもんだ。」「笑い事ではないわ。加藤軍曹はまだ呼吸がある。早く行つて担ぎ出して来い。ついでに俺の軍装も持つてきてくれ。」「いきまいて偉そうに加藤救助を言いつけたものの、我が姿なんとも形容しがたく、何か着るものは無いものかと探し回つて、やつとズボンを見つけた。三〇分ほどして軍曹は担がれてきたが、まもなく息を引き取つた。

夜明けを待つて陸路を逗留地に帰り着いた。山国出身の兵隊は仏様を焼くことが上手だ。「焼却物の中にふんどしはないか?」「あつた! 看護長、一丁あるぜ。」「そつか、ありがとう。」「合掌して頂いた。昭和二十一年四月復員。このふんどしは、わが身と共に故国に帰り着いたのである。

平成二十一年度年忌表

来年の年忌は次のとおりです。お早めにお申し込みください。

年忌	逝去年
一周忌	平成二〇年
三回忌	平成十九年
七回忌	平成十五年
十三回忌	平成九年
十七回忌	平成五年
二十三回忌	昭和六十二年
二十七回忌	昭和五十八年
三十三回忌	昭和五十二年
三十七回忌	昭和四十八年
四十三回忌	昭和四十二年
四十七回忌	昭和三十八年
五〇回忌	昭和三十五年

各個別の年忌はホームページでも見られます。ご利用ください。

行事予定

二月十一日	大般若会 正午から御詠歌奉詠 午後一時から法要、続いて 法話の会があります。
二月十五日	涅槃会 十時から法要
四月八日	灌仏会 十時から法要 甘茶を戴いてください。
八月十八日	お施餓鬼 受付は七月一日からです。 柵経は八月十日くらいからです。 原則は今までどおりですが、いま まで八月十五日にしていた方だけ 若干変更になります。詳しくは七 月のたよりでお知らせします。

個人主義の功罪

住職 春日井浩道

「個人を尊重する」ということは近代世界の大事な理念である、といわれている。日本の憲法にも「国民は個人として尊重される。…」と書いてある。そして、それは人類の普遍の原理であるとも謳っている。

しかし、そういう考えが意識され主張されるようになるのは、経済的能力に優れた人々が、身分制度という枠に窮屈を感じ、それを打ち破る原理として持ち出した、それが「個人の尊重」だったのである。この言葉は「自由、平等」と言っても「天賦の人権」と言っても結局は同じことだと思われる。要は、身分制度での拘束を受けずに思う存分に自分の能力を発揮したかったということである。福沢諭吉は、「封建制度は親の仇」だと言った。能力に恵まれながらも、田舎の小藩の下役人で終わらざるをえなかった父親の無念を思った言葉であろう。でも本当は、諭吉が西洋の「個人主義」を学んだからこそ、こういう言葉が吐けたのではあるまいか。諭吉自身は、その学問で身を立て、個人の能力を十分に達成したのである。

そういえば、明治維新だってその原動力になったのは、暇と能力

を持って余した下つ端の侍たちであった。幕府側にあつたとはいえ勝海舟なども維新の実現に寄与した志士に入るのではないかと思われる。押しなべて、身分制が厳格なら、世に出ることも許されない人達であつたといえよう。そして彼らは見事に自己実現というものを果たした。「王政復古」などというのは、彼らにとつては間に合わせの看板、それこそ借り物の帯で作つた「錦の御旗」だつた。

この能力を発揮するため、その障害となりそうな制度を排除するために「個人の尊重」という理念が作られた。その内容は「自由と平等」である。「自由」は当然に「やりたいようにやる。それに文句を言うな」ということであり、「平等」の主張は、身分制度が、その自由の実現に大いに邪魔になるからである。そして、この基本的理念が世の中の大前提であるということになり、各国の憲法にも書き込まれた。この「個人主義」が人類発展の原動力になつた。

それまでは、なん世代か前の武力競争の結果を制度にした「身分」こそ世の中の秩序だつた。身分のある者だけが世の中を動かせた。それが的確な「知恵と勇氣」さえあれば誰でも、大統領にでもなれるし、大金持ちにもなれるのであ

る。知恵の競争が世の中を動かすことになつたのだから、発展しないほつがおかしい。こうして、人類は飛躍的に豊かになつた。文明は、藤原道長や秀吉でさえできなかったことを、庶民が金さえ払えば出来るようにしてくれた。

しかし、最近になつてどうなのかと思われることが多い。民族や宗教の対立は今に始まつたことではないだろうが、先進諸国に蔓延するこの殺伐さはなんだろう。アメリカでは学生が学校で銃を乱射し、日本でも「誰でもいいから殺したかった」という青年が後を絶たない。これを道徳教育の怠慢や、日教組のせいにしたがる大臣様もいたが、そうではあるまい。経済的合理主義が本場に極限状態まで進められ、使い捨ての労働力にされてしまつた人々のうめきが聞こえるようである。

人類がこれほどまでに栄えることができたのは、言葉という心を共通にすることができると手段を持つたためである。人は、人様の間で鍛えられて「人間」になる。その人様の「世間」が最近壊れてしまつたように感じられる。たまたま競争に勝つた自動車会社だけが世の中を動かしているようなおごりと閉塞感。それは個人主義が本来目指したものではなかつた。

南城高原会

下市場には、二十九年前に発足し、今年の七月で三百回を迎えた「南城高原会」というゴルフの同好会があります。会の名前を付けられたのは、故・伊藤治夫さんです。現在会員数は男性二十二名、女性二名の計二十五名で、上は八十歳代から、下は二十歳代と、世代を超えた幅広いメンバーです。毎月第二日曜日が月例会になつていて、その日に出席できる人たちが集まつて、それぞれ手前勝手なことを言い合つて楽しくプレーしています。

私は、二百五十回目くらいから参加させて頂いています。地域の人達との交流の場でもあり、今では毎月の会をとて楽しんで思うようになりました。第一回目からのメンバーはたつた一人になつたそうですが、こんなに長く続いている秘訣は、とりたてて何の規則もなく、ただ出欠を幹事さんに連絡するだけという気楽さにあると思われまふ。八月十日に三百回達成祝賀会をしまして、まずは、四百回を目指して頑張ろう！」と氣勢を上げました。

春にはまたゴルフに良い季節を迎えます。月に一度、日常から離れ楽しく一緒にプレーしませんかどうぞご参加を。

(伊藤正廣)

先住忌

十月十二日に先代、黙定和尚の、十三回忌法要を執り行いました。厳肅な読経と、ご詠歌の奉詠を戴きました。この十二年間、内では整備事業やら、晋山式があり、世間では、区画整理でこのあたりの風景が一変し、世界ではアメリカのテロ戦争などいろんなことがありました。もう十二年？という反面、ずっと遠い昔のような気がします。



来年もよい年になりますように

檀方総代

伊藤辰男
伊藤秀文
伊藤正廣
伊藤正
大野和義
大野悟
木村廣孝
春日井浩道

お仏膳受付中

平成二十一年のお仏膳を受付中です。今までとおり、一年分一膳あたり一五〇〇円にさせて頂きます。お供えのお菓子はお下がりとしてお持ち帰りください。

梅花だより

慈眼寺梅花講は、一組、二組と二つのグループに分かれて詠賛歌を練習しています。今回は二組の様子をお伝えします。十七名の方達が、月三回、休憩を挟んで二時間みっちり練習しています。二十年位前から始めた人から、始めて五年位の人まで一緒に楽しく練習しています。写真は、忘年会の時のものです。こういう事も含めて、各行事に参加しています。



お寺へ集まって、新しい事を習い大きな声でお唱えし、その合間にお茶を飲みお喋りをし、二時間は直ぐ過ぎてしまします。体に良い事この上なしで、地域の皆さんとの交流の場にもなります。人と人との繋がりが薄れていく此の頃に、見直されても良い集まりだと思っています。

今一番の気がかりは、新しい人達になかなか入講して頂けない事です。こういう集まりの良さを是非皆さんに知って頂き、入講して欲しいと思っています。

五輪様の榎

親しまれてきましたが、落ち葉が激しく、近所迷惑ですので、剪定してもらいました。



あとがき

伊藤務（流舟）さんは平成十三年に自分史「夢を描きつづけ

て悔いなし」という二百五十ページもの大作を著作、発行されました。その中にうた心として昭和四十七年から平成十年までに詠まれた二百首あまりの短歌が載っておりました。お許し頂き、その中から私なりに二首を選び、慈眼寺たよりを通じて、檀家の皆様心に留めて頂きたく思い紹介いたしました。そんな歌のような心を持って平和な世の中になると思っています。

編集子

またも堅い話になってしまった。反省しております。結局は何が言いたかったのかという、長い伝統と、社会協力の結果として獲得された人間の知恵が、今度は自分が生まれ育った人間の社会をバラバラにし、崩壊させていくように働いているような気配が感じられるからです。いったん煙突から出た煙は二度と中へは戻っては来ないように。 杞憂でありますように。

住職

「慈眼寺たより」 第五号

平成二〇年十二月十五日 発行

ホームページ

<http://www.ma.cmw.ne.jp/jigenji/>